

最近話題となっている病害虫

イネ縞葉枯病

茨城県病害虫防除所

田畑 美奈子

学名：Rice stripe virus (RSV)

英名：stripe

イネ縞葉枯病は、1960 年代から 1980 年代にかけて全国的に大流行し問題となったが、1990 年代以降はほとんど発病がみられなくなった。しかし近年、関東以西の地域で本病の発生が確認されるようになり、その発生面積は増加傾向にある。北関東に位置する茨城県においても、2008 年に筑西市で本病の発生を確認して以来、県西地域を主に発生が拡大している。

病徴・感染経路

本病はヒメトビウンカにより媒介されるウイルス病の一種である。イネは本病に感染すると、分げつが少なくなり、葉に黄緑色～黄白色の縞状の斑紋を生じ、重症株は枯死に至る。生育初期に発病したイネの葉は、新葉がこより状になったまま伸びて垂れ下がる。また、発病株は枯死しなくても穂が出すくみ（図）となるため、本病の多発生は減収を招く。ヒメトビウンカはイネ科雑草で越冬した後、麦類の畑へ飛来し繁殖する。次に水田へ飛来し、加害しながら世代を繰り返す。イネの収穫後は再生イネ（ひこばえ）やイネ科雑草に寄生する。ヒメトビウンカは発病株を吸汁してウイルスを獲得し、ウイルスは保毒雌虫で高い確率で経卵伝染する。

防除

媒介虫であるヒメトビウンカを防除する。化学的防除として育苗箱施薬剤の施用と薬剤散布による本田防除が有効であり、耕種的防除として収穫後の圃場の耕起や越冬場所となる畦畔等のイネ科雑草の管理が有効である。被害の多い地域では、上記防除対策に加え、縞葉枯病抵抗性品種の導入が必要である。



図 イネ縞葉枯病による穂の出すくみ症状

チャバネアオカメムシ

福岡県農林業総合試験場

齊藤 紀子

学名：Plautia crossota stali Scott

英名：brownwinged green bug

本種は全国に広く分布し、九州北部から東部南部における果樹カメムシの優占種である。本種に吸汁された果実は落果するか奇形果となり商品価値を失う。1970 年代以降数年に 1 度、本種による大被害が発生している。また、全国各地で注意報が発表され、警戒されている。

生態・被害

越冬の形態は成虫で、越冬場所は広葉樹の落葉下である。4 月頃、越冬明け成虫はサクラ等の雑木に寄生して移動し、越冬量が多い年はウメ、モモ等にも被害を及ぼす。主要な餌であるヒノキ球果の成熟期である 6 月下旬頃、山林で産卵を開始し、8 月頃まで活動する。幼虫は山林で 5 齢を経て新世代成虫となる。その後、吸汁によりヒノキ球果の養分が減少すると、山林から果樹園に飛来し加害する（図）。飛来時期と飛来量は年次間差が大きい。福岡県では 1996 年、2002 年、2004 年にナシ、カキ、カンキツに加え通常は被害が少ないブドウ等でも大被害が発生した。

防除

果樹園への飛来時期や発生量の予測技術は進んでおり、予察に基づく薬剤散布が効果的である。しかし、薬剤の種類によっては天敵類に対する影響が大きく、カイガラムシやハダニ類を増やす場合があるので注意が必要である。



図 カキを吸汁する本種成虫